

## 家庭科教科書における住居領域に関する記述内容の分析と考察

速水 多佳子\*, 西村 睦美\*\*

(キーワード：家庭科, 住居領域, 教科書, 学習内容)

### I 問題の所在

現在及び将来の国民の豊かな住生活の実現を目指して、平成18年に住生活基本法が制定された。その基本理念は、「現在及び将来における国民の住生活の基盤となる良質な住宅の供給，建設，改良又は管理」，「良好な居住環境の形成」，「居住のために住宅を購入する者等の利益の擁護及び増進」，「居住の安定の確保」が図られることであり，国及び地方公共団体は，この基本理念にのっとり，住生活の安定の確保及び向上の促進に関する施策を策定し，実施する責務を有すると明記された。また，平成23年度から平成32年度までを計画期間とした住生活基本計画（全国計画）の中では，「国民一人一人が，住宅の品質又は性能やその維持管理，リフォーム等に関する必要な知識を有し，市場において適切な選択を行うとともに，地域における良好な居住環境の形成に関して積極的な役割を果たしていくこと等が可能となるよう，住生活の向上についての国民意識の高揚や人権の尊重等に関する教育活動，広報活動等を推進する。」ことが施策として必要であるとされた。住生活の安定の確保及び向上の推進のためには，国民が住環境に対して関心をもつとともに住生活に関する知識を有していることが必要であり，そのために教育の充実を推進していかなければならない。

国民が住生活に関する知識を得る場として，家庭教育，社会教育，学校教育の3つがあげられる。『住生活と住教育』（1993）によると，家庭教育は毎日の生活の中で，各家庭の実情に合わせて生活実践の場においてなされるもので，住教育の場としては効果的で基本的な方法である。しかし現在は，住生活を取り巻く状況の複雑化，多様化が進み，家庭では対処しきれない状況となっていることが指摘されている。また社会教育については，現実に直面した住生活の問題を解消するための教育としては有効であるが，対象は限られるという面がある。その一方で学校教育は，家庭教育，社会教育と比較すると，すべての国民に一定の水準での知識の獲得に最も効果を発揮することができ，計画的・継続的な指導が可能である。学校教育では，家庭科，社会科，理科，生活科，保健体育科などの教科の授業や総合的な学習の時間などの様々な教育活動の中で，住生活に関する知識を学ぶことができる。これらの中で，教科内容の一分野をなし，さらに小学校・中学校・高等学校と一貫して系統立てて取り扱うことができるのは家庭科だけである。学校教育の中で，住教育に対して家庭科が担う役割は大きい。

しかしながら，現在の学校教育の中で家庭科の授業時数は，小学校・中学校・高等学校をとおして非常に少ないという状況にある。家庭科は，衣・食・住，家族，消費，環境などの生活全般を学習対象としており，生活を営むために必要な知識及び技術を習得することを目指している。限られた時間の中で，幅広い学習対象を扱わなければならないと，先行研究によると，家庭科の中で住居領域の指導は低調であることが指摘されている。速水ら（2000）は，他領域と比較して，住居領域は取扱い時間が少なく，指導者である教員により扱いが左右されている現状を報告している。また，速水（2015）の中学校の家庭科担当教員を対象とした調査では，中学校3年間の家庭科全体の授業時数87.5時間の中で，住居領域の指導は7時間にも満たない状況であるとともに，学校によって授業時数にかなりの開きがあったと報告している。家庭科の授業時数が少ない中では，小学校・中学校・高等学校の各学校段階において，住生活に関する知識を確実に児童生徒に習得させる必要がある。しかし，家庭科担当教員によって扱いに差があるため，子ども達の学びの内容に大きな差があるという現状が見られる。家庭科担当教員が，児童生徒に対して効果的に指導するためには，教員自身に指導内容の十分な理解が求められるのはもちろんのこと，各学校段階での住居領域に関する指導内容のポイントやねらいを明確に把握しておく必要がある。

\*鳴門教育大学生生活・健康系コース（家庭）

\*\*兵庫県立加古川南高等学校

る。

筆者は、「家庭科住居領域の指導内容に関する考察－高等学校家庭科の教科書分析－」（2015）において、家庭科住居領域で取り扱われている学習内容を把握することを目的として、高等学校「家庭総合」で使用されている6冊の教科書の分析を行った。「家庭総合」は、家庭生活について総合的にとらえることを重視し、高等学校共通教科「家庭」の中では標準単位数も4単位と多い。そのため、最も指導内容が詳細な科目であり、家庭科住居領域の学習内容を網羅していると考えて取り上げた。教科書は、「教科の主たる教材」として位置づけられており、学習指導要領への準拠、中立性・公正、正確性などの観点から審査された教材であり、学校現場では教科書を基に授業が展開されている。そのため、教科書を分析することで、住居領域で指導する内容を詳細に把握することができる。教科書分析の結果からは、住居領域は教科書の後半部分に記載されている傾向があり、内容の掲載順は、「住居の機能」から始まり、「生活行為と住空間」、「室内整備」、「安全対策」、「地球環境」、「まちづくり」という一連の流れがあることがわかった。また、住居領域の内容ごとの見出しや重要語句、図表等から学習内容を整理したことにより、教科書によって掲載ページ数に10ページ以上の開きがあること、どこを重点的にどのような観点から教えるかについては、教科書によって扱いに違いがあることなどが明らかとなった。さらに、小学校・中学校・高等学校のすべての科目の教科書を分析することで、住居領域の指導内容を系統立てて把握ことができ、各学校段階の指導のポイントを整理することができると思われる。

平成26年11月に「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」の中で、教育目標・内容と学習・指導方法、学習評価の在り方を一体として捉えた、新しい時代にふさわしい学習指導要領等の基本的な考え方が示された。知識の質や量について「何を教えるか」、学びの質や深まりを重視した指導方法について「どのように学ぶか」、そして学習評価の在り方の見直しも含めた学びの成果を見る「どのような力が身に付いたか」の3点の改善を図る必要性が指摘されている。この中で、主体的・協働的に学ぶ学習方法の改革と学習成果を把握するための評価の在り方が注目されているが、そのためにはまず、どのような能力を身につけるかを踏まえて、「何を教えるか」という教育内容について整理し把握しておかなければならない。これまでの住居領域の指導が低調であり、指導する教員により児童生徒の学びの内容に差があるという現状からも、まず各学校段階の住居領域で扱わなければならない内容について整理し、明確に示す必要がある。また、その際には各学校段階の連携の視点も入れて、学習内容を系統立ててとらえておくことも重要である。

本研究では以上のような問題意識から、現在の小学校・中学校・高等学校の家庭科住居領域として取り扱われている学習内容を教科書分析によって、整理して把握することを目的とした。

## Ⅱ 研究方法

指導内容を整理するために、まず小学校・中学校・高等学校の学習指導要領で示されている内容を確認し、次に教科書の記載内容を分析した。分析に用いた教科書は、平成26年度に学校で使用されているすべての家庭科の教科書となる小学校2社2冊、中学校3社3冊、高等学校6社17冊の合計22冊である。（表1）

分析にあたっては、教科書の住居領域の掲載箇所から、見出しと太字で記載されている語句を重要語句として抜き出し、ページ数から掲載割合を計算した。文章表現以外の部分については、平面図、図、表、グラフ、写真、資料に分類して記載事項を整理するなど、教科書ごとに一覧表を作成した。そしてこの一覧表を基にして、小学校・中学校・高等学校の各学校段階の比較を行うとともに、高等学校では「家庭基礎」、「家庭総合」、「生活デザイン」の3科目の比較を行った。

## Ⅲ 結果と考察

### 1. 学習指導要領

小学校・中学校・高等学校の学習指導要領に記載されている住居領域に該当する箇所を表2に示す。小学校・中学校の家庭科は、A、B、C、Dの4つの内容から構成されており、住居領域は被服領域と同一の枠組みとしてCの内容に位置づけられている。一方高等学校では、3科目とも住居領域は単独の扱いとなり、食物領域、被服領域と並列の位置づけとなる。

小学校では、「整理・整頓や清掃の仕方」と「暑さ・寒さ、通風・換気及び採光」に重点を置いて、自分の身の回りの快適な室内環境の整え方について学ぶ。中学校では、学習対象が自分の身の回りから住居全体へと広が

表1 教科書一覧

番号	校種	教科・科目	教科書会社	書名
1	小学校	家庭	東京書籍	新編 新しい家庭 5・6
2			開隆堂	小学校 わたしたちの家庭科 5・6
3	中学校	技術・家庭 家庭分野	東京書籍	新しい技術・家庭 家庭分野
4			教育図書	技術・家庭 家庭分野
5			開隆堂	技術・家庭 (家庭分野)
6	高等学校	共通教科家庭 「家庭基礎」	東京書籍	家庭基礎 自立・共生・創造
7			教育図書	家庭基礎 とともに生きる 明日をつくる
8			教育図書	最新 家庭基礎 生活を科学する
9			実教出版	家庭基礎 パートナーシップでつくる未来
10			実教出版	家庭基礎21
11			実教出版	図説家庭基礎
12			開隆堂	家庭基礎 明日の生活を築く
13			大修館書店	家庭基礎 豊かな生活をともにつくる
14			大修館書店	未来を拓く 高校家庭基礎
15			第一学習社	高等学校 家庭基礎 とともに生きる・未来をつくる
16			共通教科家庭 「家庭総合」	東京書籍
17		教育図書		家庭総合 とともに生きる 明日をつくる
18		実教出版		家庭総合 パートナーシップでつくる未来
19		開隆堂		家庭総合 明日の生活を築く
20		大修館書店		家庭総合 豊かな生活をともにつくる
21		第一学習社		高等学校 家庭総合 とともに生きる・未来をつくる
22		共通教科家庭 「生活デザイン」		実教出版

り、「安全」に重点を置いた室内環境の整え方を学ぶ。高等学校では、学習対象が地域から日本や世界の住居へとさらに広がり、国の住宅政策や地球環境についても学習することとなる。高等学校「家庭基礎」は、家族が生活する住居内において、安全で快適に生活する方法と環境に配慮した住み方について学び、「家庭総合」は、「家庭基礎」の内容に加えて住居の維持管理やインテリアデザインについても学ぶ。「生活デザイン」は、実験・実習等の体験的な学習をとおして学ぶことを特に重視している科目であるという特性から、さらに平面計画や園芸も含めたインテリア計画に関する知識と技術についても扱う。

住居領域の指導内容について、学習指導要領解説（小学校・中学校：

表2 学習指導要領の住居領域の内容

小学校	C 快適な衣服と住まい (2) 快適な住まい方 ア 住まい方への関心、整理・整頓及び清掃の仕方と工夫 イ 季節の変化に合わせた生活の大切さ、快適な住まい方の工夫
中学校	C 衣生活・住生活と自立 (2) 住居の機能と住まい方 ア 住居の基本的な機能、工夫 イ 安全な室内環境の整え方、快適な住まい方の工夫
高等学校 「家庭基礎」	(2) 生活の自立及び消費と環境 ウ 住居と住環境 (ア) 住居と家族の生活 (イ) 安全で環境に配慮した住生活
「家庭総合」	(4) 生活の科学と環境 ウ 住生活の科学と文化 (ア) 人の一生と住居 (イ) 住生活の計画と選択 (ウ) 住生活の文化 (エ) 住生活と環境
「生活デザイン」	(5) 住生活の設計と創造 ア 家族の生活と住居 (イ) 快適さの科学と住空間の設計 (ア) 住居の機能 (ア) 快適な住空間の設計 (イ) 家族のライフステージ (イ) インテリア計画と住居 ウ 住居と住環境 (エ) 住生活のデザインと実践 (ア) 住環境と地域 (イ) 環境に配慮した住生活

表3 学習指導要領における住居領域の指導内容

分類	項目	小学校	中学校	「家庭基礎」	「家庭総合」	「生活デザイン」
A	住居の機能と計画		・住居の機能と住まい方 ・家族の住空間 ・住居の基本的な機能 ・簡単な図などによる住空間の構想	・住居の機能 ・住居の条件 ・住居の計画や選択 ・ライフステージに応じた住居の条件	・住居の機能 ・住居の条件 ・住居の間取り条件 ・ライフステージの変化と住要求の関係 ・ライフステージに応じた住居 ・よりよい住空間や住生活 ・人間と住居とのかかわり ・平面図やインテリアデザイン	・住居の機能 ・住居の計画 ・創造的な住生活 ・住生活の設計 ・家族の生活とライフステージに応じた住空間 ・平面計画 ・住要求と条件 ・平面表示記号など計画図画の表現法 ・インテリア計画
B	住居の室内環境	・快適な住まい方 ・住まい方への関心 ・整理・整頓 ・清掃の仕方 ・暑さ・寒さ ・通風・換気及び採光	・快適な住まい方	・健康かつ快適な住居 ・日照、採光、換気、遮音、温熱・空気環境	・快適かつ健康な住居 ・保健性、利便性、快適性 ・住宅内部の居住環境	・ユニバーサルデザイン ・健康に配慮した快適な住居 ・生活産業と園芸とのかかわり ・保健性、利便性、安全性
C	住居の安全		・家族の安全を考えた室内環境の整え方	・安全な住宅 ・防火、防犯、耐震などの安全性 ・障害者、高齢者などへの配慮 ・バリアフリー住宅	・安全な住宅 ・安全性	・安全な住居 ・バリアフリーデザイン ・安全性
D	住生活の文化	・季節の変化に合わせた生活の大切さ			・気候や風土に応じた各地域の住居の特徴や変遷 ・様々な住様式 ・住生活の文化とその背景	・住生活を営むために必要な知識や技術 ・住文化の継承・創造 ・住生活と住居の歴史の変遷や文化
E	住生活と環境			・地球環境に配慮した住居 ・耐久性の高い住居	・地球環境保全 ・耐久性のある住居 ・維持管理・計画 ・長期使用の必要性 ・持続可能性 ・地球環境に配慮した居住環境 ・自然環境	・長期使用 ・維持管理の重要性 ・耐久性の高い住居 ・資源・環境などに配慮した住生活 ・持続可能性 ・地球環境を守るための住居と住生活の在り方 ・自然環境と調和した住生活
F	地域社会とのかかわり			・地域の住環境 ・地域コミュニティとの共生 ・地域施設との関係	・社会環境 ・住宅周辺の住環境	・社会環境 ・地域などのかかわり ・住居を取り巻くコミュニティ
G	住生活関連法規				・住生活の現状 ・住宅政策や法規等の基本理念	・住環境を守る制度 ・住生活の現状

平成20年告示，高等学校：平成21年告示）から語句を抜き出して類似する内容を分類して整理すると，表3のようにAからGの7つの項目に分けることができた。「A 住居の機能と計画」は，住居の機能や条件，生活行為と住空間，ライフステージによる住居の変化について，「B 住居の室内環境」は，整理・整頓や日照，採光，換気などの快適に過ごすための室内環境について，「C 住居の安全」は，家庭内事故や防火，防犯，耐震などの安全性について，「D 住生活の文化」は，季節に応じた住まい方や日本の伝統的な住居や世界の住居について，「E 住生活と環境」は，地球環境に配慮した住居や耐久性を高くするための住居の維持管理について，「F 地域社会とのかかわり」は，地域とのかかわりや住居の周辺の環境について，「G 住生活関連法規」は，住宅政策や住居に関連する法規についての内容である。

## 2. 教科書の記載内容

### (1) 教科書の記載内容一覧

分析に用いた22冊の教科書の記載内容について，それぞれを一覧表にまとめた。その中から，通し番号1の小学校「新編 新しい家庭5・6」（東京書籍）を表4に示す。「見出し」については，大見出し，中見出し，小見出しとして抜き出すとともに，「語句」は太字で書かれているものを抜き出した。現行の学習指導要領では，教科の特質に応じた言語活動の充実が図られている。家庭科では，生活に関連の深い言葉について，言葉の意味を理解することはもちろん，言葉を活用して考えることで思考の深まりを促し，児童生徒の実際の生活の中で生きた言葉となるように指導することが求められている。教科書に太字で示されている語句を見ることで，各見出しの中で重要とされている内容を押さえることが可能となると考えた。また言語活動の充実には，図表やグラフなどを読み取って理解することも含まれている。特に家庭科では教科の特質から，これらの図表などを用いた学習



活動の充実も重要である。そのため、「図」、「表」、「グラフ」、「写真」、「資料」として、それぞれの掲載点数をカウントし、タイトルを抜き出した。さらに、記載内容について、住居領域の7つの項目（住居の機能と計画、住居の室内環境、住居の安全、住生活の文化、住生活と環境、地域社会とのかかわり、住生活関連法規）ごとに分類するとともに、それぞれの記載されている分量をページ数でカウントした。

## (2) 全領域に占める住居領域の割合

22冊の各教科書について、家族・保育・消費・環境・衣服・食物・住居の7領域に分類し、各領域が記載されているページ数をカウントした。(表5)住居領域の掲載ページ数を見ると、最も多い教科書と最も少ない教科書を比較すると、小学校は2冊が同じページ数であったが、中学校は22ページと12ページ、高等学校「家庭基礎」は22ページと12ページ、「家庭総合」は30ページと18ページとそれぞれ10ページ以上の開きが見られた。他領域と比べると、小学校と中学校は食物領域のページ数が多く、小学校の1冊を除いて、すべての教科書が住居領域の倍以上のページ数を扱っていた。高等学校は、学習指導要領の中では「食・衣・住」と並列に記載されており、内容と取扱いに関する記述内容についても、同様に扱われているにもかかわらず、教科書の記載内容では住居領域の配当ページ数が極端に少ないことがわかる。

校種別、科目別の7つの領域が占める割合の平均を図1に示す。住居領域の割合が最も少なかったのは中学校8.5%、最も多かったのは小学校17.5%であった。小学校は、衣服領域(31.4%)と食物領域(35.1%)がほぼ同一の割合であり、中学校では、食物領域(34.3%)は衣服領域(19.7%)よりもかなり高い割合を占めている。小学校と中学校の学習指導要領の内容の枠組みでは、食物領域は単独で、住居領域と衣服領域は同一の枠組みとして位置づけられているが、教科書のページ数割合には、この位置づけが反映していないことがわかる。また、「家庭基礎」は、住居領域の割合が9.6%であり、全体の1割にも満たない状況である。現在の高等学校の履修状況を平成27年度の教科書需要数(教科書の種類数・点数・需要数、2015)から見ると、「家庭基礎」が全体の約77%を占めている。つまり、高等学校の3科目の中で最も多く学ばれている「家庭基礎」の教科書の住居領域の扱いが最も少ないということになる。

表5 教科書の各領域の頁数

番号	校種科目	家族 (頁)	保育 (頁)	消費 (頁)	環境 (頁)	衣服 (頁)	食物 (頁)	住居 (頁)	合計 (頁)
1	小学校	5	0	6	0	32	38	17	98
2		12	0	4	4	29	30	17	96
平均(%)		8.8	0.0	5.2	2.1	31.4	35.1	17.5	100
3	中学校	8	30	18	6	38	66	18	184
4		22	28	28	12	46	70	22	228
5		19	28	18	11	36	73	12	197
平均(%)		8.0	14.1	10.5	4.8	19.7	34.3	8.5	100
6	高等学校 「家庭基礎」	40	20	16	4	24	42	16	162
7		42	26	20	11	26	46	22	193
8		33	18	16	8	18	46	16	155
9		36	22	16	4	20	44	14	156
10		40	22	22	6	18	38	14	160
11		36	22	16	4	18	42	12	150
12		46	19	20	5	17	45	15	167
13		40	16	18	6	12	38	14	144
14		34	16	16	6	12	36	12	132
15		30	20	14	4	16	44	14	142
平均(%)		24.2	12.9	11.2	3.7	11.6	27.0	9.6	100
16	「家庭総合」	32	24	46	6	36	50	24	218
17		58	28	24	12	42	62	30	256
18		42	26	20	6	36	54	20	204
19		58	26	26	8	40	58	20	236
20		50	22	22	8	26	46	18	192
21		36	24	14	4	36	54	22	190
平均(%)		21.3	11.6	11.7	3.4	16.7	25.0	10.3	100
22	「生活デザイン」	42	30	16	4	36	56	28	212
平均(%)		19.8	14.2	7.5	1.9	17.0	26.4	13.2	100

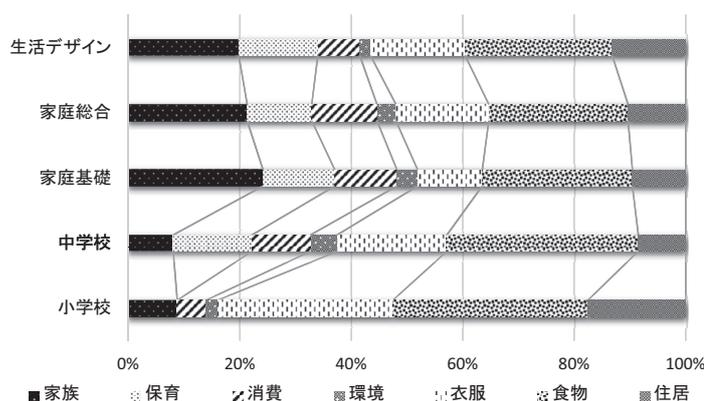


図1 教科書に占める各領域割合(校種別・科目別)

住居領域が教科書全体のどの位置に掲載されているかを見た。小学校は単元の構成上、各領域が混在しているが、中学校と高等学校は各領域が独立した章立てとなっており、住居領域は教科書の後半部分に位置している場合が多かった。学習指導要領では、学習する領域の指導の順序については特に示してはおらず、教科書の特性からも各領域間に順序性はなく、年間指導計画の立て方や各事項の重点の置き方については、家庭科教員の裁量に任されている。しかし、住居領域が敬遠されたり、年度末に授業時数が不足して住居領域の指導が十分に実施できなかったりする状況については、教科書の後半部分に住居領域が掲載されている傾向が、少なからず影響を与えているのではないかと考えられる。

### (3) 住居領域の各内容の割合

住居領域の記載内容について、表3で示したAからGの7つの内容（住居の機能と計画、住居の室内環境、住居の安全、住生活の文化、住生活と環境、地域社会とのかかわり、住生活関連法規）に分類し、記載されているページ数の割合を算出した。（表6）校種別、科目別のAからGの7つの内容が教科書中に占める割合の平均を図2に示す。

小学校は、「B 住居の室内環境」の内容を主に扱っており、全体の約80%近くを占める。「E 住生活と環境」については、小学校の学習指導要領には記載されていない内容であるが、2冊の教科書共に記述が見られた。中学校は、全体の平均では学習指導要領で重点が置かれている「C 住居の安全」（27.4%）の割合が最も高く、次が「B 住居の室内環境」（26.3%）、「A 住居の機能と計画」（24.6%）と続く。しかし教科書により、B,A,Cの順となる教科書や「D 住生活の文化」の割合が他の2冊よりも高く、A, B, C, Dが同じ割合となっている教科書もあるなど、教科書によって重点の置き方が異なっていた。

高等学校「家庭基礎」は、全体の平均では「A 住居の機能と計画」（27.0%）の割合が最も高く、次が「B 住居の室内環境」（19.5%）、「E 住生活と環境」（14.5%）、「F 地域社会とのかかわり」（14.0%）と続く。教科書別に見ると、「D 住生活の文化」、「E 住生活と環境」、「F 地域社会とのかかわり」のそれぞれの割合が他と比べて著しく高い教科書があり、重点の置き方にかなりの差が見られた。「D 住生活の文化」は、気候や風土に応じた住居があることを、世界各地の特徴ある住居や日本の各地域の住居の例をもとに理解させる内容で

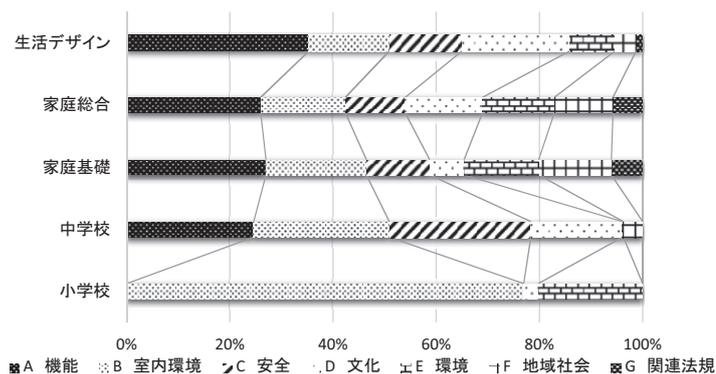


図2 住居領域の内容割合（校種別・科目別）

表6 住居領域の各内容割合（%）

番号	校種・科目	A 機能	B 室内環境	C 安全	D 文化	E 環境	F 地域社会	G 関連法規	%
1	小学校	0.0	77.8	0.0	5.6	16.7	0.0	0.0	100
2		0.0	76.1	0.0	0.0	23.9	0.0	0.0	100
平均		0.0	76.9	0.0	2.8	20.3	0.0	0.0	100
3	中学校	22.5	23.5	31.5	20.0	0.0	2.5	0.0	100
4		26.3	30.4	25.8	8.3	0.4	8.8	0.0	100
5		25.0	25.0	25.0	25.0	0.0	0.0	0.0	100
平均		24.6	26.3	27.4	17.8	0.1	3.8	0.0	100
6	家庭基礎	36.3	22.5	12.5	3.8	12.5	9.4	3.1	100
7		28.3	10.9	18.7	4.3	8.7	21.7	7.4	100
8		29.4	17.6	11.8	0.0	17.1	17.6	6.5	100
9		18.3	27.8	11.1	26.1	7.2	7.2	2.2	100
10		30.6	19.4	6.3	0.0	12.5	25.0	6.3	100
11		22.9	27.9	10.0	12.9	6.4	17.1	2.9	100
12		26.7	26.7	23.3	0.0	10.0	6.7	6.7	100
13		25.0	12.5	12.5	6.3	25.0	12.5	6.3	100
14		26.0	15.3	8.0	7.3	26.7	9.3	7.3	100
15	26.3	14.4	8.1	6.3	18.8	13.8	12.5	100	
平均		27.0	19.5	12.2	6.7	14.5	14.0	6.1	100
16	家庭総合	24.2	15.0	8.3	19.2	20.8	8.3	4.2	100
17		25.0	11.7	14.3	13.3	13.3	16.7	5.7	100
18		22.1	20.8	8.3	27.9	5.4	5.4	10.0	100
19		26.3	21.1	14.7	10.5	5.3	16.8	5.3	100
20		30.0	10.0	10.0	10.0	25.0	10.0	5.0	100
21	28.2	20.0	13.6	9.1	13.6	10.9	4.5	100	
平均		26.0	16.4	11.6	15.0	13.9	11.4	5.8	100
22	生活デザイン	35.3	15.6	14.1	20.9	8.8	4.1	1.3	100

ある。住まいの特徴がわかるように、日本の住居や世界の住居などの写真が多く掲載されている教科書では、Dの割合が高くなっている。

「家庭総合」の全体の平均は、最も割合が高いのは、「A 住居の機能と計画」(26.0%)、次が「B 住居の室内環境」(16.4%)となり、「家庭基礎」と同じであるが、その次は「D 住生活の文化」(15.0%)、「E 住生活と環境」(13.9%)と続く。個々の教科書で見ると、「家庭総合」についても、「家庭基礎」と同じく教科書によって内容割合にばらつきが見られた。

#### (4) 図表等の記載状況

教科書ごとの「平面図」、「図」、「表」、「グラフ」、「写真」、「資料」の記載点数を表7に示す。「平面図」は、JIS規格の平面表示記号が用いられている真上から見た間取り図のことで、「図」は、絵図や鳥瞰図のことで、例えば日射の入り方や通風の様子などである。「表」は、表組みがされているもので、椅子座と床座の特徴、居住面積水準、化学物質と健康被害などがあり、「グラフ」は、数量が視覚的に表現されたもので、家庭内事故の割合や日射量など、「写真」は、日本と世界の住居や街並みなどの写真、「資料」は、欄外に文字で加えられた説明のことで、図や表に説明が加えられているものは図表と資料の両方でカウントした。校種別、科目別の図表等の記載状況を図3に示す。

どの校種も図と資料が多く使用されており、校種が上がるにつれて掲載点数が多くなる傾向がある。小学校は、表やグラフよりも図や写真を多く使用する傾向がある。学習指導要領では、中学校段階では平面図は扱わずに、住空間を想像しやすくするために鳥瞰図などの簡単な図を活用して学ぶこととなっており、平面図は高等学校段階から扱う。しかし、中学校の1冊では、発展の内容として平面図の記載が見られた。平面図は高等学校ではすべての教科書に記載されており、科目別で見ると、「家庭基礎」は1点から8点、「家庭総合」は4点から10点、「生活デザイン」は7点の掲載となっており、各科目間で開きがある。平面図の掲載点数の平均は、「家庭基礎」は、3.3点であり、高等学校で新たに扱う内容であるにもかかわらず、掲載が少ない。また、図や写真、資料についても教科書によって掲載点数にはばらつきが見られ、このことがページ数の多少とも関連している。

図表等は視覚的にも、児童生徒の興味・関心を引きつけることができる。住居領域の扱いが低調である理由の一つとして、児童生徒の興味・関心が低いという点があることから、理解を助けることやそれぞれの内容による興味・関心の度合いを視野に入れながら、図表等の掲載については考えていく必要がある。

#### (5) 重要語句の記載状況

教科書に太字で書かれているものを重要な語句であると考えて抜き出した。太字語句が非常に多く掲載されて

表7 図表等の記載点数(点)

番号	校種・科目	平面図	図	表	グラフ	写真	資料
1	小学校	0	17	1	5	24	20
2		0	17	4	2	20	23
平均		0	17	2.5	3.5	22	21.5
3	中学校	0	20	7	3	12	31
4		2	18	1	1	7	28
5		0	15	2	3	11	23
平均		0.7	17.7	3.3	2.3	10.0	27.3
6	高等学校 「家庭基礎」	8	24	5	5	7	26
7		4	18	9	7	11	37
8		6	16	1	6	9	35
9		1	17	5	2	5	16
10		2	12	2	0	11	28
11		1	18	3	2	3	15
12		3	16	5	8	10	23
13		3	17	4	7	7	26
14		2	19	5	3	6	26
15		2	18	2	5	7	28
平均		3.3	17.4	4.3	4.4	7.7	25.8
16	「家庭総合」	10	33	8	10	11	32
17		8	23	11	8	13	46
18		5	23	8	4	6	20
19		7	14	7	6	20	23
20		6	20	4	9	11	31
21		4	31	4	5	15	44
平均		6.7	24.0	7.0	7.0	12.7	32.7
22	「生活デザイン」	7	24	8	2	10	25

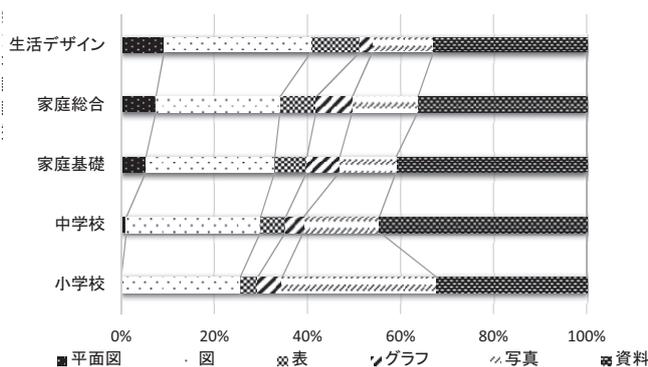


図3 図表等の記載点数の割合(校種別・科目別)

いる教科書と、極端に少ない教科書とがあった。抜き出した語句を、A から G の7つの内容（住居の機能と計画、住居の室内環境、住居の安全、住生活の文化、住生活と環境、地域社会とのかかわり、住生活関連法規）に分類し、何冊の教科書にその語句が使用されていたかをカウントして一覧にしたものが表8-1（小学校・中学校・高等学校「家庭基礎」）、表8-2（高等学校「家庭総合」、「生活デザイン」）である。

現行の学習指導要領は言語活動の充実が図られており、家庭科の中でも言語能力を育成するために、衣・食・住などの生活にかかわる事象に関する言葉が強調して記載されている。教科書によって、重要とされる語句にばらつきが見られたが、掲載が多い語句に関する内容については、特に重要であると判断できる。小学校で、2冊の教科書ともに掲載されていた重要語句は、「整理」、「整とん」、「物や環境を大切に生活」の3語であった。中学校の3冊の教科書すべてに掲載されていたのは、「家族共有の空間」、「個人の空間」、「家事の空間」、「衛生の空間」の住空間に関する4つの名称であった。高等学校「家庭基礎」の10冊の教科書のうち7冊以上で重要語句となったのは、「平面図」、「結露」、「シックハウス症候群」、「日照」、「採光」、「通風」、「ゆか座」、「いす座」、「コレクティブハウジング」、「コーポラティブハウジング」の10語であり、「家庭総合」の6冊の教科書のうち5冊以上で重要語句となったのは、「動線」、「平面図」、「換気」、「シックハウス症候群」、「いす座」の5語であった。

高等学校で見られた重要語句から指導内容のポイントをA から G の内容ごとにまとめると、次のようになる。「A 住居の機能と計画」は、平面表示記号が表す意味を知ることによって平面図から空間を読み取ることができるようになり、動線を考える重要性や生活行為と空間のかかわりを学ぶ。「B 住居の室内環境」は、日照、採光、通風、換気的重要性などから快適な住生活について考え、結露やシックハウス症候群の対策について学ぶ。「C 住居の安全」は、自然災害や人為災害の危険性から、安全な住生活を送るための対策について具体的に学ぶ。「D 住生活の文化」は、ゆか座やいす座などの起居様式などの様々な住様式から、世界と日本の住文化について学ぶ。「E 住生活と環境」は、持続可能な住居という視点から環境共生住宅や住居の維持管理について学ぶ。「F 地域社会とのかかわり」は、これからの住まい方として、コレクティブハウジングやコーポラティブハウジングについて学ぶとともに、地域とのかかわりについて学ぶ。「G 住生活関連法規」は、これまでの住宅政策や現在の日本の住宅事情から、住生活基本法や建築基準法の趣旨について学ぶ。

#### (6) 住居領域の各内容の記載順序

教科書の記載ページを、住居領域のA から G の7つの内容（住居の機能と計画、住居の室内環境、住居の安全、住生活の文化、住生活と環境、地域社会とのかかわり、住生活関連法規）ごとに分類した表（参考：表4）をもとにして、住居領域の指導の流れの傾向を校種別に検討した。

小学校の2冊ともに共通していたのは、まず整理・整頓についての内容から学習が始まることである。その後には快適な住まい方についての学習として、夏または冬の暮らし方を扱う。清掃の仕方については、整理・整頓の続きで学ぶ場合と、夏または冬の暮らし方の間で学ぶ場合とがあった。小学校家庭科は2年間の中で、各領域が混在した形で学んでいくため、夏または冬の暮らし方を同一学年で学ぶ場合と、異なる学年で学ぶ場合とが出てくる。中学校では、共通の学習の流れが見られた。まず初めに住居領域の学習の導入として、日本各地の特徴ある住まいや街並みなどの口絵がある。本文は「A 住居の機能と計画」から始まり、住まいの役割や住空間について学習した後に、家族と共に暮らす住まいについて考え、「C 住居の安全」で家庭内事故と防犯について学んだ後に、「B 住居の室内環境」で空気環境と騒音などの音とのかかわりを扱う。

高等学校「家庭基礎」は、すべての教科書に共通する流れはなく、「A 住居の機能と計画」から始まる教科書が多く、「B 住居の室内環境」の快適な住まいから始まる教科書は2冊であった。その後は「B 住居の室内環境」または「C 住居の安全」、そして「E 住生活と環境」で住まいの維持管理について、「F 地域社会とのかかわり」または「G 住生活関連法規」という流れであった。「家庭総合」では、導入は住居の機能について、次に生活行為と住空間、室内の快適な過ごし方、安全対策について学び、最後にまとめとして地球環境、まちづくりについて扱うという流れが多かった。日本の伝統的な住居や世界の住居などについては、導入で扱ったり中ほどで扱ったりしている。今後、住居領域の効果的な指導法を考える中で、生徒の興味・関心を引きつけながら理解が深まっていくような授業の一連の流れを作成していく必要がある。

表 8-1 重要語句一覧 (小学校・中学校・高等学校・高等学校「家庭基礎」)

校種	分類	語句	出現数
小学校	B	整理、整とん そうじ、風通し、暖房、照明、日光、暖房器具、換気、採光、住まい方、よごれの種類、はたく、はく、吸い取る、ふく	2
	E	物や環境を大切にしたい生活 不用品、分別、地球の資源	1
		家族共有の空間、個人の空間、家事の空間、生理・衛生の空間	2
	A	和式、様式、移動と収納の空間、住まい、生命や財産を守る、休息とくつろぎを与える、子ども成長を見守る、生活行為、個人的なもの、共同のもの、家族のコミュニケーション、個人のプライバシー、家族の住まい方、共同生活の空間	3
		結露	1
	B	室内環境、一酸化炭素、二酸化炭素、化学物質、換気、通風、かび、ダニ、騒音、ユニバーサルデザイン、シックハウス症候群	2
	C	家庭内事故	1
	D	バリアフリー、高齢者、バリアフリー住宅、自然災害、防災、防火、防犯	1
	F	コーポラティブハウス、コレクティブハウス	1
		平面図 間取り、動線 住要求、間取り図 nLDK、ゾーニング、JIS、住み替え、居住性 生活行為、個人的行為、生理的行為、共同の行為、サービス行為、住空間、住宅取得費、ゾーニング、ライフスタイル、人体寸法・動作寸法、モジュール、家族周期、見取り図、ダイニングキッチン、ゾーン、ケアハウス、住み替えバンク、リハースモーター	7 4 4 3 3 2
A	生活行為、個人的行為、生理的行為、共同の行為、サービス行為、住空間、住宅取得費、ライフスタイル、人体寸法・動作寸法、モジュール、家族周期、見取り図、ダイニングキッチン、ゾーン、ケアハウス、住み替えバンク、リハースモーター	1	
家庭基礎	B	結露、シックハウス症候群 日照、採光、通風 照明、換気 自然換気、機械換気 日射、ユニバーサルデザイン 遮音	8 7 6 4 3 3 2
		一酸化炭素中毒、気密性、かび、ダニ、生活騒音、住まい方のルール、暖かさ、涼しさ、化学物質過敏症、日照調節、防音、収納の工夫	1
		バリアフリー 自然災害、人為災害 バリアフリー住宅、防災、防犯 自助、共助、公助、ホームセキュリティ 二次災害、住居内の事故、耐震構造、補助錠、耐震診断、バリアフリー化	5 4 3 2 2
	D	ゆか座、いす座 食寝分離 就寝分離	7 2 1
	E	環境共生住宅 再生活宅 再生活宅、メンテナンス	4 3 2
		省エネルギー住宅、緑のカーテン、エコハウス、ヒーアアライアント現象 管理組合、長期修繕計画、劣化、エコマテリアル、耐用年数	1
	F	コレクティブハウジング、コーポラティブハウス シェア・ハウジング 住環境、まちづくり グループ・リビング、安全性、保健性、利便性、快適性、持続可能性、都市基盤(インフラ) 都市計画、ライフライン、意見公募、地域コミュニティ	7 4 4 3 2 1
		住生活基本法 建築基準法 容積率、住生活基本計画、居住水準、建築率	6 5 2
	G	バリアフリー新法、住宅政策、区分所有法、用途地域制度、住生活品質確保法、住宅性能表示制度、最低居住面積水準、誘導居住面積水準、公営住宅、次世代省エネルギー基準	1

表 8-2 重要語句一覧 (高等学校「家庭総合」・「生活デザイン」)

校種	分類	語句	出現数
家庭総合		動線、平面図 表示記号 nLDK、間取り、住要求、JIS、間取り図、人体寸法、動作寸法	5 3 2
	A	生活行為、個人的行為、生理的行為、共同の行為、サービス行為、住空間、住宅取得費、ゾーニング、モジュール、家族周期、住み替え、シェア、生活の場、家事作業の場、人びとが集う場、居住性、ケアハウス、住み替えバンク、リハースモーター 共同生活空間、個人生活空間、家事労働生活空間、生理衛生空間、インテリアデザイン	1
		換気、シックハウス症候群 結露、ユニバーサルデザイン、日照、採光、通風	5 4 3 2
	B	自然換気、機械換気、日射、騒音 収納の工夫、一酸化炭素中毒、気密性、かび、ダニ、生活騒音、暖かさ、涼しさ、シックハウス症候群、日照調節、遮音	1
	C	バリアフリー 自然災害、人為災害 二次災害、住居内の事故、バリアフリー住宅、自助・共助・公助、ホームセキュリティ、住宅の耐震化、バリアフリー化、防災、防犯	4 3 1
	D	いす座 食寝分離、ゆか座 起居様式、中廊下型住宅、ダイニングキッチン しつらい、農家、町家、武家、公私室分離、寝殿造り、書院造り、文化住宅、就寝分離	5 4 4 2 1
	E	環境共生住宅 エコマテリアル、スケルトン・インフィル方式、省エネルギー化、パッシブシステム、待機電力	3 1
		コレクティブハウジング、コーポラティブハウジング シェア・ハウジング、まちづくり 安全性、保健性、利便性、快適性、持続可能性、都市計画	4 3 2
	F	住まい方のルール、共用部分、専有部分、管理組合、持ち家、借家、グループ・リビング 住環境、ライフライン、都市基盤(インフラ)、地域コミュニティ	1
		住生活基本法 建築基準法 建築率、容積率、住生活基本計画、公営住宅	4 3 2
生活デザイン	A	住宅政策、都市計画法、居住面積水準、景観法、居住水準、住宅の品質確保法、住宅性能表示制度、最低居住面積水準、誘導居住面積水準、公営住宅、公団住宅	1
	B	家族周期、住み替え、JIS、表示記号、平面図、錯覚、色相・明度・彩度、色相環	
	C	日照、日射、採光、照明、通風、換気、自然換気、機械換気、結露、シックハウス症候群、シックハウス症候群	
	D	ホームセキュリティシステム、バリアフリー	1
	E	持続可能	
	F	都市基盤(インフラ)	
	G	住生活基本法	

## IV まとめ

家庭科は、衣・食・住、家族、消費、環境などの生活全般を学習対象としている教科である。現在、学校教育の中で家庭科の授業時数は少なく、生活にかかわるすべての内容を扱うには、それぞれの領域に費やす時間が短く限られているという状況にある。特に住居領域に関しては、他領域と比較して扱いが低調で、教員によって指導に差があることがこれまでに報告されている。限られた時間の中で効果的に指導するには、何をどのように教えるかが重要となる。そこで、現行の学習指導要領の下で、住居領域では何を指導すべきかを整理して把握することを目的とした研究を行った。研究をすすめるにあたり、まず小学校・中学校・高等学校の学習指導要領で示されている指導すべき内容を確認して分類し、一覧表を作成した。次に、平成26年度に学校で使用されている22冊の家庭科の教科書の記載内容について比較・考察を行った。教科書の中で住居領域の占める割合、住居領域の7つの項目（住居の機能と計画、住居の室内環境、住居の安全、住生活の文化、住生活と環境、地域社会とのかかわり、住生活関連法規）ごとの割合、図表等や重要と考えられる語句の記載状況、そして教科書に記載されている内容の順序から指導の流れについて検討した。教科書を詳細に分析した結果、各学校段階の特徴を知ることができ、指導しなければならない学習内容について整理することができた。

今後は、この整理した内容をもとにして、具体的な授業展開について考えていく必要がある。その際、学習素材が大きいために教室に持ち込みにくいという住居領域の特性を踏まえて、扱いやすい教材を考案していかなければならない。分析の結果からは、すべての学校段階の教科書において、図表等が多く用いられており、学校段階が上がるにつれて掲載点数も多くなる傾向があることがわかった。図表等は、視覚的にも児童生徒の興味・関心を引きつけることができる。教科書に掲載されている図表等の活用はもちろんであるが、最新の資料等についてもICT機器を用いて拡大投影して提示すると、さらに興味・関心も湧いて理解も深まるであろう。また、高等学校段階から扱うこととなっている住居領域の特徴とも言える平面図は、各自の教科書の図を用いての説明は困難な面がある。そのため、授業でICT機器を用いて拡大して提示すると、同じ画面を生徒全員が目にして見ることとなって、説明もしやすくなり、内容を共有してより実感をもって学ぶことができると考えられる。今後、学習素材が大きいために教室に持ち込みにくいという住居領域の特性を補うためにも、ICT機器を用いた教材開発が望まれる。

すべての児童生徒に一定水準での知識の獲得に効果を発揮することが可能である学校教育において、住居教育の充実を推進していくためにも、児童生徒が興味・関心をもち、理解を深めることができるような住居領域の授業を考案し、授業の質の向上を目指していきたい。

本研究は平成25年度～27年度 JSPS 科学研究費基盤研究 (C) (課題番号25350076) の助成を受けたものである。

## 参考文献

- 奈良女子大学住生活学研究室編、『住生活と住教育 これからの住まいと暮らし方を求めて』、彰国社、1993、pp. 251-265
- 速水多佳子・関川千尋、「学校教育における住居領域の教育システムの有効性について」、日本家政学会誌、vol. 51、No. 4、2000、pp. 53-66
- 速水多佳子、「家庭科住居領域の指導の実態と課題－中学校教員の調査を通して－」日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）、2015. 9、pp. 43-44
- 速水多佳子、「家庭科住居領域の指導内容に関する考察－高等学校家庭科の教科書分析－」、鳴門教育大学研究紀要、第30巻、2015、pp. 503-512
- 初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）、2014. 11
- [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo/0/toushin/1353440.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo/0/toushin/1353440.htm) (2015年9月1日アクセス)
- 文部科学省、『小学校学習指導要領解説家庭編』、東洋館出版社、2008. 8
- 文部科学省、『中学校学習指導要領解説技術・家庭編』、教育図書、2008. 9
- 文部科学省、『高等学校学習指導要領解説家庭編』、開隆堂、2010. 5
- 教科書の種類数・点数・需要数（平成27年度用）。
- [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/kyoukasho/gaiyou/04060901/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2015/06/](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/gaiyou/04060901/___icsFiles/afieldfile/2015/06/)

15/1235103\_001.pdf (2015年9月1日アクセス)

- 文部科学省検定済教科書, 『新編 新しい家庭 5・6』, 東京書籍, 2011.2
- 文部科学省検定済教科書, 『小学校 わたしたちの家庭科 5・6』, 開隆堂, 2011.2
- 文部科学省検定済教科書, 『新しい技術・家庭 家庭分野』, 東京書籍, 2012.2
- 文部科学省検定済教科書, 『技術・家庭 家庭分野』, 教育図書, 2012.2
- 文部科学省検定済教科書, 『技術・家庭 (家庭分野)』, 開隆堂, 2012.2
- 文部科学省検定済教科書, 『家庭基礎 自立・共生・創造』, 東京書籍, 2013.2
- 文部科学省検定済教科書, 『家庭基礎 とともに生きる 明日をつくる』, 教育図書, 2013.2
- 文部科学省検定済教科書, 『最新 家庭基礎 生活を科学する』, 教育図書, 2013.2
- 文部科学省検定済教科書, 『家庭基礎 パートナーシップでつくる未来』, 実教出版, 2013.1
- 文部科学省検定済教科書, 『家庭基礎21』, 実教出版, 2013.1
- 文部科学省検定済教科書, 『図説家庭基礎』, 実教出版, 2013.1
- 文部科学省検定済教科書, 『家庭基礎 明日の生活を築く』, 開隆堂, 2013.3
- 文部科学省検定済教科書, 『家庭基礎 豊かな生活をともにつくる』, 大修館書店, 2013.4
- 文部科学省検定済教科書, 『未来を拓く 高校家庭基礎』, 大修館書店, 2013.4
- 文部科学省検定済教科書, 『高等学校 家庭基礎 とともに生きる・未来をつくる』, 第一学習社, 2013.2
- 文部科学省検定済教科書, 『家庭総合』, 東京書籍, 2013.2
- 文部科学省検定済教科書, 『家庭総合』, 実教出版, 2013.1
- 文部科学省検定済教科書, 『家庭総合』, 開隆堂, 2013.3
- 文部科学省検定済教科書, 『家庭総合』, 教育図書, 2013.2
- 文部科学省検定済教科書, 『家庭総合』, 第一学習社, 2013.2
- 文部科学省検定済教科書, 『家庭総合』, 大修館書店, 2013.4
- 文部科学省検定済教科書, 『生活デザイン』, 実教出版, 2013.1

# Analysis and Study of Descriptive Contents on Housing Education in Home Economics Textbooks

HAYAMI Takako\* and NISHIMURA Mutsumi\*\*

(Keywords : home economics, housing education, textbooks, learning content)

Home economics is the study of lifestyle in general, including food, clothing, housing, family, consumption, and environment. Few teaching hours are devoted to home economics, so little time is spent on each of these topics. One report stated that less focus is given to housing field in particular than to other topics, and instruction in this topic differs depending on the teacher. What to teach and how to teach it are important factors for effective instruction in a limited time. This paper therefore lays out what should be taught about housing field under current government curriculum guidelines. To do this, the authors determined instructional contents by comparing and studying the written contents of textbooks, the main teaching materials used for this subject. In all, 22 textbooks were used for this study, all from the 2014–15 school year: two used at the elementary school level, three in junior high school, and 17 in senior high school (consisting of 10 focusing on “Home Basics,” six on “Comprehensive Home Economics,” and one on “Life Design”). Analysis of the textbooks clarified what contents students should learn in elementary, junior high, and senior high school.

---

\*Department of Home Economics Education, Naruto University of Education

\*\*Hyogo Prefectural Kakogawa Minami High School